

英語語法文法学会

第 26 回大会資料

日 時：2018 年 10 月 20 日（土）

開催校：立命館大学衣笠キャンパス

住所：〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 5 6-1

<http://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

順路：

■JR・近鉄京都駅から

市バス 50 にて 42 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 205 にて 38 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バス「高雄・京北線」にて 30 分、「立命館大学前」下車

■JR 円町駅から

市バス 15 にて 10 分、臨にて 9 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 204/205 にて 5 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バス「高雄・京北線」にて 8 分、「立命館大学前」下車

■阪急電車西院駅から

市バス 205 にて 13 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

■京阪電車三条駅から

市バス 12 にて 53 分、市バス 15 にて 34 分、市バス 51 にて 36 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 59 にて 40 分、「立命館大学前」下車

■京福電鉄等持院駅から徒歩 7 分

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2018

英語語法文法学会 第 26 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円（予稿集代を含む）

日 時：2018 年 10 月 20 日（土）

＜存心館食堂が利用可能です（11:00-14:00）。また、「立命館大学前」のバス停周辺にコンビニ、飲食店が数軒あります。＞

開催校：立命館大学衣笠キャンパス

住所：〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 5 6-1
<http://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

開催校委員：佐藤詩恵、佐野まさき、滝沢直宏、松田佑治

大会実行委員：西田光一（委員長）、住吉 誠、大竹芳夫、滝沢直宏、中澤和夫、
林 龍次郎、吉田幸治

●司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（洋洋館 4 階 YY404 教室）●大会本部・運営委員会室（洋洋館 4 階 YY403 教室）●一般休憩室（洋洋館 4 階 YY402 教室）●書籍展示（洋洋館 4 階 YY401 教室）

受付：10 時 00 分より 洋洋館 3 階

ワークショップ（洋洋館 3 階 YY305 教室） 10.30 – 11.38

司会 金澤俊吾（高知県立大学）

1. 「結果動詞 break の語法について」

岸野佐和子（無所属）

2. 「形式と意味の相互侵略—conceive と conceive of の場合—」

金子輝美（元・愛知淑徳大学非常勤）

3. 「現代英語における in order to と so as to の存在意義について」

西中圭亮（桜丘高等学校（三重県伊賀市））、家口美智子（金沢大学）

4. 「「近くて遠い」と near and far—オクシモロンの観点から」

田岡育恵（大阪工業大学）

受付：12 時 30 分より 洋洋館 3 階

研究発表 13.00 – 14.45

第1室（洋洋館3階 YY302 教室）

司会 澤田茂保（金沢大学）

1. 13.00 – 13.35 「The truth is that S. の構文パターン: truth の修飾語に焦点を当てて」
西脇幸太（岐阜県立岐阜北高等学校）
2. 13.35 – 14.10 「物の使用目的を表す不定詞関係節について」
西前 明（函館大学）
3. 14.10 – 14.45 「「形容詞+enough」による前置修飾と後置修飾」
桑名保智（旭川医科大学）

第2室（洋洋館3階 YY305 教室）

司会 林 龍次郎（聖心女子大学）

1. 13.00 – 13.35 「Did you ever...? と Have you ever...? の用法とその分布」
山田美紀（金沢大学大学院）
2. 13.35 – 14.10 「束縛的モダリティを表す need to と have to をめぐって」
長友俊一郎（関西外国語大学）
3. 14.10 – 14.45 「動詞 invite の意味解釈と事象スキーマ」
出水孝典（神戸学院大学）

総会（洋洋館3階 YY302 教室） 15.00 – 15.20

総合司会		大竹芳夫（新潟大学）
開会の辞	会 長	大室剛志（名古屋大学）
開催校代表挨拶		滝沢直宏（立命館大学・言語教育情報研究科長）
学会賞選考報告	会 長	大室剛志（名古屋大学）
事務局報告	事務局長	五十嵐海理（龍谷大学）

シンポジウム （洋洋館3階 YY302 教室） 15.35 – 17.45

テーマ「英語の文法研究とレトリック」

司会 西田光一（山口県立大学）

1. 「-ing 名詞の意味とメトニミー」
山添秀剛（札幌学院大学）
2. 「英語句動詞の多義性におけるメタファー」
辻本智子（大阪工業大学）
3. 「英語修辭疑問文のレトリック性—after all を伴う事例を中心として」
後藤リサ（関西外国語大学）
4. 「英語の広告における定名詞句の表現効果」
西田光一（山口県立大学）

閉会の辞 佐野まさき（立命館大学）

懇親会 諒友館食堂 Rosso 18.00 – 19.30

（懇親会費：一般 5,000 円 学生 3,000 円）

ワークショップ（洋洋館 3 階 YY305 教室） 10.30 – 11.38

司会 金澤俊吾（高知県立大学）

結果動詞 **break** の語法について

岸野佐和子（無所属）

動詞が文の意味解釈の中心であるとして、動詞の意味的分類は長年多くの研究者たちによってなされてきた (Murphy 2010)。例えば、語彙意味論の研究者は、状態変化動詞は移動表現の中では使用不可という成果を発表し、一方、構文文法の研究は、移動構文で使用可能な動詞の振る舞いを探求している。

特に、動詞 **break** は両研究の枠組みの中で判定が割れており、Rappaport Hovav and Levin が結果動詞 **break** は経路句と共起しないと主張する一方、BBC, TIME からの用例を観察すると、現実には経路句と **break** が共起した文が使用されていることが分かる。また、Boas (2003) や Goldberg (1995, 2001) は、そのような文の存在を認めている事情も考察の対象とする。

- (1) a. #John broke the egg into the bowl. (Yasuhara 2013: 154)
- b. $\sqrt{\text{He broke the egg into the bowl.}}$ (Boas 2003: 76)
- c. *Kelly broke the dishes into a pile. (Levin 1998: 103)
- d. $\sqrt{\text{The cook cracked the eggs into the glass.}}$ (Yasuhara 2013: 142)

形式と意味の相互侵略—**conceive** と **conceive of** の場合—

金子輝美（元・愛知淑徳大学非常勤）

標題の 2 つの形式の意味と用法の基本的違いについては、本学会第 7 回大会 (1999 年 11 月、日大) のワークショップで、結論として (1) を提示した。

- (1) **conceive NP** の NP は、話者の心的活動の過程で創造される。一方、**conceive of NP** では、NP は既存のものとして捉えられる。

今回は、(1) の原則論の周辺を補充したい。国内外の辞書類に見られる (2) のような模範例文や、(3) のような実例はどのように説明されるべきなのか。

- (2) a. Can you conceive of life without electricity? (*RHD*²)
- b. Can you conceive life without electricity? (『プログレッシブ英和 3』)
- (3) a. We tend to conceive of the world as populated by discrete objects.
(Langacker 1990:207)
- b. The world is conceived as being populated by countless objects of diverse character. (Langacker 1991:170)

Langacker は発表者宛の私信で、I think it is a matter of overlap in the ranges of uses of the two constructions, hence the choice is potentially arbitrary for many situations. と述べている。話者による事態の捉え方の違いであると説明されることが多いが、観点を転じれば、両形式の本来の意味的境界線は、実際には、すべ

ての話者によって厳密に守られているとは限らないと言えるだろう。

現代英語における **in order to** と **so as to** の存在意義について

西中圭亮（桜丘高等学校（三重県伊賀市））、家口美智子（金沢大学）

Corpus of Historical American English (COHA) で確認すると、**in order to** と **so as to** はアメリカ英語で頻度が減少傾向にあるが、本発表は、両フレーズがどうい
う点において存在意義を発揮しているか明らかにする。両フレーズは Swan
(2016) では同じ項目で説明され、一般の **to** 不定詞の目的を表す副詞的用法の
formal なバージョンであるとされているが、それ以外の機能について調査する。
in order to は一般の **to** 不定詞の副詞的用法と比べ、① **in order for ... to** という形、
つまり **to** 不定詞の意味上の主語を表す **for** 句が出現する形が増加していることで、
複雑な文型を表現するのに使用されるようになっていて、②文頭で使われること
がどのレジスターでも一貫して多いことが特徴である。一方、**so as to** は否定形
so as not to が頻度を増やしていて、2000 年代ではレジスターによっては肯定形
より頻度が多いこともある。否定形が現代英語において **so as to** が存在する意義
を保つ要因になっているようだ。以上、両フレーズの使用の特徴を考察する。

「近くて遠い」と **near and far**—オクシモロンの観点から

田岡育恵（大阪工業大学）

オクシモロンでは、反対の意味の形容詞が 1 つの対象を描写するが意味の矛盾
は生じない。反対の形容は異なる観点に基づくからである。「近くて遠い」は、「近
くて遠い国」のように 1 つのものが近くて遠いというオクシモロンである。他方、
near and far はどうかと言えば、BNC の **near and far** の用例 27 例は、**the Near and
Far East, the sea both near and far, going near and far** のように **near** と **far** が別々
に修飾する構造になるものばかりであった。Quirk *et al.* (1985) によれば、相反す
る意味の形容詞が **and** による接続で名詞を修飾する場合、形容詞は別々に名詞を
修飾し 2 つの形容詞が全体で名詞を修飾することはない。**near and far** の場合も
同様である。語順を逆にした **far and near** は BNC で 17 例、「近くて近い」は「現
代日本語書き言葉均衡コーパス」で 1 例見られる。日英語とも「近」が先に来る
という傾向は iconicity の原理で考えられるが、オクシモロンの場合は、一方の表
現から喚起される想定とその否認がその語順に関係しているように思う。表現か
ら喚起される想定とその否認が分からなければ、オクシモロンの意味は理解しが
たいと思われる。また、逆接表現を用いずに聞き手に表面の矛盾とその解決をゆ
だねるところにオクシモロンの妙味があると考ええる。

The truth is that S.の構文パターン : truth の修飾語に焦点を当てて

西脇幸太 (岐阜県立岐阜北高等学校)

本発表では、The truth is that S (=Sentence). の構文パターンの拡張において、名詞 truth を前置修飾する形容詞がどのような影響を与えるのかについて議論する。Bolinger (1972) や大室 (2005) における The fact is that S. の議論を踏まえ、インフォーマント調査とコーパスから得られたデータを基に、以下の 5 点を示す：(1) The truth is that S. において、truth が修飾語を伴わないパターンが基本形であり、最も多くの構文パターンを許しやすい。(2) truth の左隣に生起する最も高頻度の形容詞である whole が、The truth is that S. に生起した The whole truth is that S. が (1) の基本形に次いで、複数の構文パターンを許しやすい。(3) 右隣に truth を生起させやすい形容詞 unvarnished が The truth is that S. に生起した The unvarnished truth is that S. が (2) の形に次いで、複数の構文パターンを許しやすい。(4) truth との共起関係において重要度の低い inescapable が生起した The inescapable truth is that S. タイプが、最も周辺的であり、構文パターンの派生を最も許しにくい。(5) (1)-(4)のいずれのタイプでも、“the truth is” が副詞のように文中や文末に生起するパターンの容認度は極めて低い。以上の事実観察を基に、形容詞のタイプが、構文の広がりや密接な関わりがあることを主張する。

物の使用目的を表す不定詞関係節について

西前 明 (函館大学)

Quirk *et al.* (1985: 1269) は、先行詞を意味上の目的語とする不定詞関係節は常に法的解釈 (例えば should) になると述べているが、これは正しくない。本発表のインフォーマント調査によると、the fork (for you) to sterilize には、the fork that you should sterilize の法的意味しかないが、the fork (for you) to eat the dessert with には、the fork that you should eat the dessert with の法的意味と the fork that you eat the dessert with の非法的意味がある。後者の非法的意味は「物の使用目的」を表していると主張する。本発表では、「不定詞関係節の to には、必然性・可能性・予定などを表す法助動詞の to と物の使用目的を表す非法助動詞の to がある」と仮定する。法助動詞の to を用いた不定詞関係節を法的不定詞関係節、非法助動詞の to を用いた不定詞関係節を非法的不定詞関係節とそれぞれ呼ぶことにする。法的不定詞関係節は法助動詞を用いた定形関係節で、(物の使用目的を表す) 非法的不定詞関係節は、動詞の現在形を用いた定形関係節および [for -ing] (the fork for eating the dessert (with)) で、それぞれ言い換えることができる。本発表は、物の使用目的を表す非法的不定詞関係節は生起できるが法的不定詞関係

節は生起できない構造があることを報告する。一つは、関係節が be 動詞に後続する構造であり、もう一つは、Berman (1974: 38) が取り上げた、関係節が lose のような動詞の目的語を修飾する構造である。両者の構造における非法的不定詞関係節と法的不定詞関係節の対立を説明する。

「形容詞+enough」による前置修飾と後置修飾

桑名保智 (旭川医科大学大学)

副詞としての enough が形容詞を修飾することにより構成される「形容詞+enough」が名詞を修飾する場合は以下の 3 パターンが可能である。

- (1) He is {(a) a soldier brave enough/(b) a brave enough soldier/(c) brave enough a soldier} to attempt it. (G⁵)

先行研究によると、文脈によっては (1a) タイプ (N+Adj+enough) は (1b) タイプ (Adj+enough+N) よりも好まれる傾向があることが指摘されている。

- (2) When he retired, he went on {(a) a trip long enough/(b) ?a long enough trip} to give him a good rest. (小西 (編) 1989: 602)

(2b) は容認可能性が下がっているものの非文とまでは言えない事実を考えると、N+Adj+enough と Adj+enough+N にはどのような差がどの程度存在するのか疑問が生じる。

本発表は、N+Adj+enough と Adj+enough+N を音韻的、意味的、統語的に比較し、「形容詞+enough」は前者では句の範疇である一方、後者では複合語に近いことを示すものである。

第 2 室 (洋洋館 3 階 YY305 教室)

司会 林 龍次郎 (聖心女子大学)

Did you ever...? と Have you ever...? の用法とその分布

山田美紀 (金沢大学大学院)

本発表では Have you ever と Did you ever で始まる疑問文を取り上げる。基本的に、両者は想定する時間が異なるとされる。例えば次の Declerck (1991:108) の例では、(1a) は発話時までを、(1b) は「聞き手がプロの選手だったとき」という過去の期間を想定する (過去時の Did you ever...?)。

- (1) a. Have you ever (=up to now) beaten him?
b. Did you ever beat him (when both of you were still professional players)?

一方、Did you ever...? でも、発話時までの時間を想定する (現在時の Did you ever...?) ことがあり、その場合は Have you ever...? と同等に扱われてきた。

そこで本発表では、Searle (1969) の適切性条件をもとに用例を「質問」「助言」「主張」「感嘆」に分類したうえで、過去時と現在時の Did you ever...? の用法の分布の違いと、同等に扱われてきた Have you ever...? と現在時の Did you

ever...? の用法の分布の違いについてみていく。分析結果として、まず、過去時の Did you ever...? の大部分が「質問」であるのに対し、現在時の場合は、「主張」「感嘆」の用法も現れることを指摘する。次に、現在時の Did you ever...? と Have you ever...? を比較した場合、用法の分布に大きな違いがみられることを指摘する。

束縛的モダリティを表す need to と have to をめぐって

長友俊一郎（関西外国語大学）

Leech (2003) は、コーパスを活用し、英語（疑似）法助動詞の使用頻度等に関して、2つの時代間における比較を行った。本発表では、1990年代に使用頻度の面で顕著な伸びを示したと報告されている、need to と have to に注目する。本研究の目的は、次の問題に関して、「動機づけ」の観点から「束縛的モダリティ」（＝義務や必要など）を表す need to と have to についての意味論的・語用論的考察を行うことにある。

問題 A : need to/have to と (must や should などの) 法助動詞とでは、どのような類似点・相違点があるのか。

問題 B : need to/have to の表す力の強さ、言語行為、義務の一般性／特定性に関する特徴はどのようなものであろうか。

問題 C : どのような場合に、need to と have to が使い分けられるのであろうか。

動詞 invite の意味解釈と事象スキーマ

出水孝典（神戸学院大学）

本発表では、Levin と Rappaport Hovav の提唱してきた事象スキーマを用いて、英語の基本動詞 invite の意味解釈を考察する。かつて池上 (1981: 266-267) は、動詞 invite を「〈行為〉だけを表わして、意図された結果の〈達成〉まではその意味範囲に含んでいない」例として挙げており、様態・結果の相補性に従うと様態動詞になる。しかしながら、英英辞典ではこの動詞を to ask someone to come to a party, wedding, meal etc (LDOCE⁶) のように定義しており、come という結果を含まないのかという疑問が残る。また、John invited Mary (to dinner) for an hour. では、to dinner がない場合でも、1時間にわたって来るように誘った解釈だけでなく、1時間のイベントに誘ったという解釈も可能だとインフォーマントは言う。本発表では小説より収集した実例とインフォーマント調査に基づき、(i) invite は様態動詞（過程動詞）で [x ACT<INVITE> y] の事象スキーマをもつこと、(ii) for an hour を伴った場合、児玉 (2002: 37-45, 77-85) のいう「アスペクトあいまい構文」に相当し、結果状態ではなく「目的」「目当てとしての期間」を表す場合があること、(iii) (ii)の「目的」を表す for 句は事象スキーマの結果状態ではなく、ACT 部分を敷衍するはたらきをすることを主張する。

シンポジウム（洋洋館 3 階 YY302 教室）15.35 – 17.45

テーマ 「英語の文法研究とレトリック」

司会 西田光一（山口県立大学）

文法とレトリックは似て非なるところがある。両者とも私たちがことばを使ううえで駆使する手段だが、文法はことばの使い方を規定し、レトリックはことばの新しい使い方を創出する。両者は商売敵でもある。レトリックの表現力は文法によって制限され、文法の規律はレトリックによって覆される。事例に応じて、または目的に応じて、どちらを優先するかが変わるが、それは文法とレトリックに all or nothing の選択を強いるものではなく、両者の配分をめぐる交渉の結果に因るものと考えられる。本シンポジウムでは、この問題意識のもと、英語の文法に關与するレトリックの諸相を、具体例を通じて明らかにし、レトリックは文法のどのような側面を覆す力を有しており、逆に文法はレトリックのどのような側面を制限するかという論点に一定の見通しをつけることを目的としている。まずは各講師が専門とする事例研究を通じ、英語の語、句、節、談話という各レベルにおける文法とレトリックの交渉過程を詳らかにすることから始めたい。

-ing 名詞の意味とメトニミー

山添秀剛（札幌学院大学）

レトリックが語の意義展開を説明するのに有効な手段であることは、すでに多くの研究によって実証されている。隣接性に基づく言語現象たるメトニミーもまた重要な意義展開パタンのひとつである。本発表では、「接尾辞-ing をとる名詞」(nominal gerund, verbal noun, deverbal noun)の意味とメトニミーの関係を論じる。

文法的には、(おもにプロセスを表す) 動詞からの派生名詞でしかなかった -ing 名詞が通時的に動詞としての文法機能も担うように変化してきた。他方 (1) のように意味的には、その多義構造において〈もの〉化した意義を引き起こす《プロセスで結果》のメトニミーも無視できない力をもつ。

(1) a. Building a new road here will force house prices down. (OALD) 〈過程〉

b. There is a limited supply of land for building. (LDOCE) 〈過程〉

c. They need money to pay for new buildings. (LDOCE) 〈結果〉

発表においてはまず、辞書の見出し語として登録される-ing 名詞を調査し、語義の特徴を観察する。次に、その語義と形式の関係、あるいは実際の使用状況における指示対象の捉え方と文法的な数の関係を確認する。さらに、日本語の動名詞と比較し、意義展開の傾向に差があるのかにも触れたい。

英語句動詞の多義性におけるメタファー

辻本智子 (大阪工業大学)

ほとんどが単音節の基本動詞と限定された不変化詞 (particle) から成る句動詞は、その統一感のない多義性から、多様な意味をただ覚えるしかないと思われがちである。動詞・不変化詞それぞれの要素が本来の意味を失い、全く新しい意味をもつようになる場合もあるが、動詞と不変化詞の結合による意味変化には程度差がある。個々の要素の意味がある程度予測可能なものから、完全に予測不可能なイディオム化したものまで存在する。本発表では、『英語多義ネットワーク辞典』(2007) で示された意味ネットワーク記述を用い、句動詞 bring out の多義性を分析していく。まず動詞 bring と不変化詞 out の多義的意味の展開をそれぞれ確認し、どのような結合パターンから句動詞 bring out の意味が形作られているかを分析する。また結合パターンが同じである以下の例では、その多義性に概念メタファー(容器のメタファー) が作用していることに焦点をあてる。

(1) a. Jenny opened the cupboard and brought out a couple of bottles.

(LDOCE)

b. The spices really bring out the flavour of the meat. (LDOCE)

何を「容器」に見立てるかによって bring out の意味を整理することで、より体系的でわかりやすい記述を提案したい。

英語修辞疑問文のレトリック性—after all を伴う事例を中心として

後藤リサ (関西外国語大学)

英語修辞疑問文のレトリック性—「情報要請性」からの乖離—の理解を促す言語表現や言語現象は多様である。例えば、After all, are you coming to the party? にあるような談話標識の after all をはじめ、ever 等の否定極性項目、文否定 (否定辞 not) は、疑問文に現れれば否定の偏りを有する標識として機能し、その結果修辭的な読みをもたらすとする先行研究がある。

また、最近の研究では、これら文極性の偏りをもたらす標識に加え、疑問文発話にサーカズムを伴うか否かに焦点を当てたものもある。サーカズムは日本語の「嫌味」、「当てこすり」に相当し、発話の情動的側面を担う一方で、「情報要請性からの乖離」としてのレトリック性を読み解く鍵となる。

このように修辞疑問文のレトリック性の理解においては、当該発話の言語情報、前後の文脈や非言語情報等が重要な役割を果たす。本発表では特に、文頭の after all 疑問文事例を収集し、共起する他の標識や文脈等も観察していくこととする。修辭的な読みをもたらす複数の要素の相補的機能について、認知語用論の視点からレトリック性を紐解いていきたい。

英語の広告における定名詞句の表現効果

西田光一 (山口県立大学)

本発表では英語の定名詞句に関する文法とレトリックを扱う。基本的な用法に

限ると、定名詞句の文法は話し手と聞き手に接近可能な指示対象を表すというもので、ここから「談話中で初出の指示対象は不定名詞句で、2 番目の言及では定名詞句で表す」という規則が導かれる。だが、定名詞句の文法は、誰に接近可能なものを表すかという点で細かい指定がなく、この点を利用してレトリック用法が生じている。代表例には、視点用法として小説の冒頭で先行詞なしで使われる定名詞句があり、そのような指示対象への接近可能性は、聞き手・読者にはないが、小説の登場人物にはあって、読者は小説の世界の都合を受け入れざるをえない。雑誌広告で使われる定名詞句も視点用法の延長で扱うことができる。ここにも実際はない接近可能性をあるかのように表現するレトリックが働いている。しかし、ないものをあると言いくるめるだけでは、ことばの用法として定着しない。広告では、読者たる消費者にとって今はまだなくても、これからあるものに変えられるという想定のもとに初出の定名詞句が使われ、そこから定名詞句の宣伝効果がもたらされるという説明の可能性を探究する。このような定名詞句の用法を題材に、個々の規則を守ることで表現の形式を整える文法と、規則の網を潜り抜けて、ことばの表現力を高めるレトリックの相互依存の関係を明らかにしたい。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉		
会長	大室剛志			
事務局長	五十嵐海理			
会計	前川貴史			
会計監査委員	住吉 誠			
運営委員	五十嵐海理	牛江一裕	内田聖二	梅咲敦子
	大竹芳夫	大室剛志	金澤俊吾	吉良文孝
	澤田茂保	住吉 誠	滝沢直宏	中澤和夫
	西田光一	林龍次郎	吉田幸治	
編集委員	吉良文孝（編集委員長）			
	牛江一裕	大竹芳夫	大橋 浩	大室剛志
	金澤俊吾	澤田茂保	滝沢直宏	中澤和夫
	中山 仁	西田光一	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日 2018 年 9 月 5 日

編集・発行	英語語法文法学会
代表者	大室剛志
事務局	〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5 龍谷大学社会学部 五十嵐海理研究室内 Tel.: 077-543-7436（研究室） Fax: 077-543-7615（社会学部教務課） Email: segu.office@gmail.com URL: http://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会 © 英語語法文法学会

衣笠キャンパスへのアクセス



<http://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

■JR・近鉄京都駅から

- 市バス 50 にて 42 分、「立命館大学前（終点）」下車
- 市バス 205 にて 38 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分
- JR バス「高雄・京北線」にて 30 分、「立命館大学前」下車

■JR 円町駅から

- 市バス 15 にて 10 分、臨にて 9 分、「立命館大学前（終点）」下車
- 市バス 204/205 にて 5 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分
- JR バス「高雄・京北線」にて 8 分、「立命館大学前」下車

■阪急電車西院駅から

- 市バス 205 にて 13 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

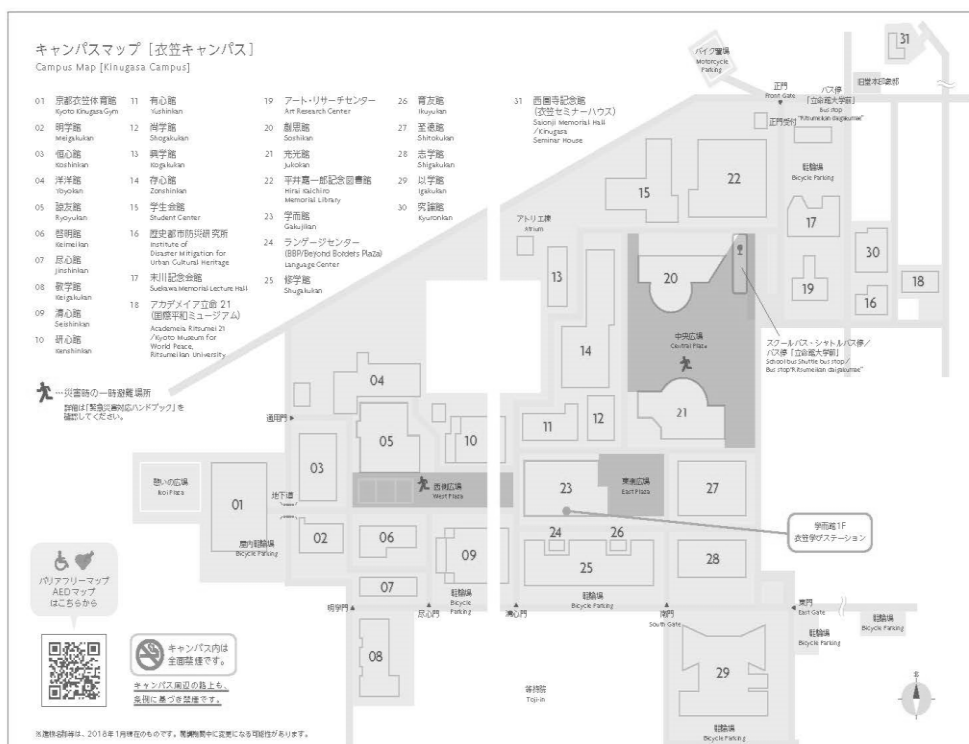
■京阪電車三条駅から

- 市バス 12 にて 53 分、市バス 15 にて 34 分、市バス 51 にて 36 分、「立命館大学前（終点）」下車
- 市バス 59 にて 40 分、「立命館大学前」下車

■京福電鉄等持院駅から徒歩 7 分

会場案内

衣笠キャンパス・構内図



上図 04 の建物が会場の洋洋館です。

※食堂等の営業時間：存心館地下の食堂：11:00-14:00

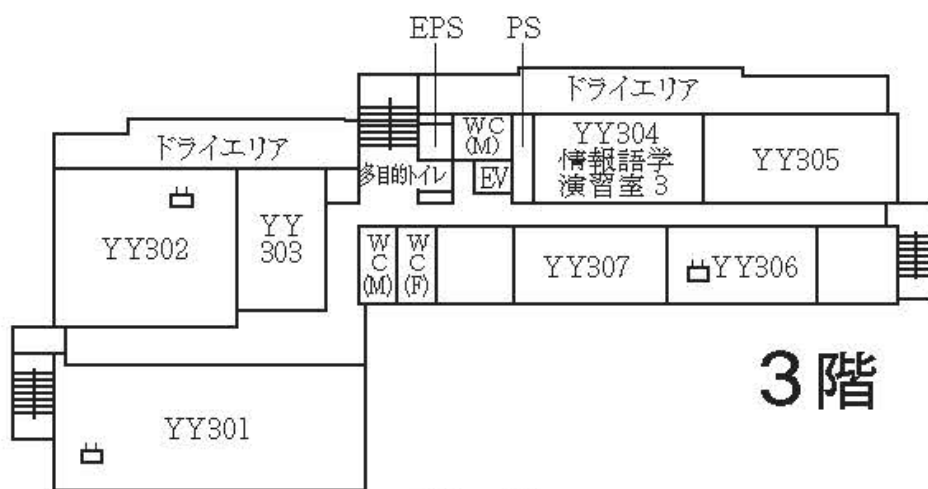
（また、「立命館大学前」のバス停周辺にコンビニ、飲食店が数軒あります。）

※大会当日は授業実施日ですので、静粛な環境の保持にご協力をお願い致します。

※京都は観光シーズンなので、早く宿泊先を確保することをお薦めします。大阪府・滋賀県など近隣の府県の方が宿泊先を見つけやすいと思われます。

洋洋館教室配置図

ワークショップ、研究発表、総会、シンポジウム（洋洋館 3 階）



●司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室（洋洋館 4 階 YY404 教室）●大会本部・運営委員会室（洋洋館 4 階 YY403 教室）●一般休憩室（洋洋館 4 階 YY402 教室）●書籍展示（洋洋館 4 階 YY401 教室）

